

コロナ再流行 あるか

ドイツなど欧州急増

WHO警鐘 接種進展、重症化は抑制

世界で新型コロナウイルスの感染が再拡大するかに焦点が当てられ始めている。過去2週間で米、ドイツやロシアなど約80カ国で増加している。インドや日本など100カ国では新規感染者数が減ったが、予断は許さない状況だ。

インドや日本 100カ国は減

米ジョンズ・ホプキンス大の集計によると、世界の新規感染者数（7日移動平均）はデルタ型の流行一巡を受けて9月以降減少傾向にあったが、10月中旬の40万人を底に再び増加に転じ、直近では44万台で推移する。ワクチン接種が進んだ国では重症化は過去よりも抑えられているとみられるが、感染の拡大傾向を懸念する声が強まっている。

欧州はドイツの感染拡大が顕著だ。独ロベルト・コッホ研究所が5日公表した1日あたりの新規感染者数は1週間前より5割多い3万7120人で過去最高を更新した。死者数は1000人を超えているが、1年前のピーク時には1000人の死亡が出た。同国ではワクチン接種率が67%で、重症化は抑えられているとみられる。

5日に記者会見し、ワクチンの接種完了から6カ月以上経過した人を対象に追加接種（ブースター接種）を急ぎ考えを示した。ワクチンの接種率が3割にとどまるロシアでは死者数の増加が目立つ。11月に入って1日あたりの死者数は連日12000人弱で推移し、過去最悪の状況が続いている。ロシア政府によると累計の死者数は6日までで24万人を超え、欧州でも突出している。

背景には国民のロシア製ワクチンに対する不信感がある。ロシアは国産ワクチン「スプートニクV」をいち早く承認したが、外国製ワクチンの接種は受けることができない。

ポーランドなど中東欧でも感染が拡大しており、WHOのハンス・クルグ欧州地域事務局長は4日、「欧州がパンデミック（世界的大流行）の震源地に戻ってきた」と危機感を示した。今後3カ月で医療が逼迫する可能性があり、この状況が続けば、2022年2月までに欧州地域で新たに50万人の死者が出る可能性があると述べた。

シンガポールや韓国など、アジアの一部でも感染者数が増えているが、日本では12月19歳の1回接種率が70%以上に達している。米国の12・17歳や英国の16・18歳は6割弱、英国の12・16歳は2割強にとどまる。

インドでは1日あたり新規感染者数が一時40万人を超える水準で推移していたが、5月をピークに減少に転じ、足元では1万人程度にまで下がった。

当局が9月に実施した調査によると、デリー首都圏の新型コロナウイルスの抗体保有率は97%に達した。商都ムンバイでも9割近くに抗体があるとの報告がある。これまでの感染拡大やワクチン接種を通じて、社会全体で感染免疫を獲得したとの見方も一部では出ている。

感染者数の減少について、ウイルスが減衰したとの指摘もある。国立遺伝学研究所の井ノ上逸朗教授は日本で新型コロナウイルスのゲノム（全遺伝情報）解析データを分析。第5波のウイルスはゲノムの変異をうまく修正できなくなり自滅した可能性があるという。ただ井ノ上教授は「状況証拠を説明する仮説であり、実証はできていない」と話す。

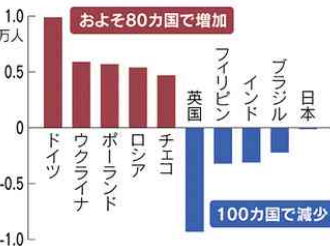
世界ではワクチンだけでなく、飲み薬の実用化も近づく。英インペリアル・カレッジ・ロンドン

の石原純博（免疫工学）と同じく対処できるような「新型コロナウイルスはインフルエンザなどの感染症」と指摘する。

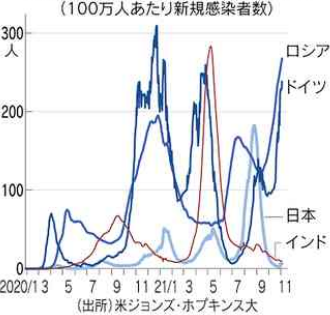
（ロンドン）佐竹実、ベルリン、石川潤、ムンバイ、花田亮輔、越川智瑛



世界のコロナ新規感染者数はやや増加



2週間前比の感染者の動向を見ると...



コロナの感染は欧州で増加が目立つ

(100万人あたり新規感染者数)

（出所）米ジョンズ・ホプキンス大